

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業知っておきたい話」-155- (2面)
- ・農業白書(案)米の安定供給に向けた対応(3面)
- ・北海道クレン新ブランド「キタノチカラウシ」 (4面)
- ・農場拝見 中山農場(佐賀県) (5面)
- ・平均離乳頭数10.7頭に増加(養豚農業実態調査) (6面)
- ・26年度農業危害防止運動 (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

# 開拓情報

発行所  
 公益社団法人全国開拓振興協会  
 〒102-0093 東京都千代田区平河町1-2-10  
 TEL 03-6268-9995  
 FAX 03-6268-9996  
 ホームページ <https://www.kaitakusya.or.jp>  
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

## 畜産クラスター《持続性向上タイプ(新規)》

中小規模の生産者、新規就農者、経営の継承者が活用しやすく

1. 収益性の向上には直ちに結びつかない取り組みも支援  
 国産飼料の生産・利用、雇用の創出、新規就農・経営継承  
 アニマルウェルフェア、家畜衛生、野生鳥獣害防止対策  
 といった様々な取り組みから選択して成果目標を設定
2. 施設の補改修・中古機械の導入を推進  
 施設: 収益性向上の成果目標は不要  
 (堆肥舎など非収益施設のみの改修可)  
 機械: 中古機械に限り3者見積もりは不要
3. 1の取り組みの実現に必要な施設・機械を補助対象に追加  
 車両消毒ゲート、野生動物侵入防止柵、飼料生産用ドローン等
4. トラクターの導入に係る知事特任は不要

(農水省の資料を基に作成)

農水省は、畜産クラスター事業に「持続性向上タイプ」を新設した(25年度補正予算)。

同事業の見直しのポイントとしては、従来の規模拡大や販売額の増加など、収益力強化への支援に加え、すぐには収益性に結びつかなくても、経営の安定や持続性につながる取り組みについても支援を行うというもの。

持続性向上タイプの主な内容は図の通り。

アニマルウェルフェアに関する機械等の購入、新規就農・経営継承時の発生する修繕費等、直ちに収益性向上に繋がらないものにも対応。

成果目標の設定と取り組みの例は次の通り。

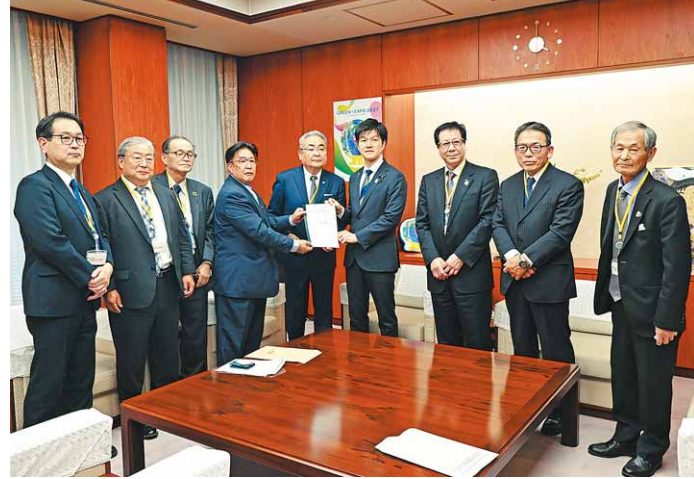
☆取り組み: 牛舎内や車両の消毒を徹底するため、出入口に消毒ゲートの整備、噴霧器の導入。

☆成果目標: サルモネラ感染症の発生率の5%低下。

☆取り組み: 既存牛舎を活用した酪農家の親子継承のため、バークリーナーの改修・換気口の整備・牛と従業員の動線確保のための通路の改修。

☆成果目標: 経営継承支援チームの設置と、年3回以上の研修の実施。

## 畜産経営の持続性向上に焦点 畜産クラスター新規事業開始



大臣室にて要望書を手渡す(中央が鈴木大臣)

## 全開連

### 鈴木農水大臣に要請

#### 開拓畜産・酪農の持続的発展のために

- 【要望書の要約】
1. 畜産酪農経営の危機的状況と生産継続に向けた支援について
  2. 経営安定に向けた政策支援の継続・強化
  3. 飼料価格高騰への機動的な対応
  4. 生産基盤維持に向けた中長期的支援
  5. 牛肉輸出拡大に向けた輸出施設の認証取得支援について
  6. 子会社のゼンカイミート(株)で屠畜、加工された牛肉について、輸出先からの、輸出施設としての認証を早期取得できるように支援を要請

全開連は5月12日、新津賀原会長をはじめ役員10名が、鈴木農水大臣に対して、開拓畜産・酪農の持続的発展のための要請活動を行った。

中東情勢の緊迫化等により、燃料や肥料、飼料等の供給不安定化や価格高騰等、生産コストの高止まりが続いている。現場での経営努力だけでは乗り越えられず、生産継続が困難となる経営が増加している状況にある。

鈴木大臣に対し、経営安定に向けた政策支援の継続・強化を強く要望した。各理事から、子牛価格や資材価格の高騰、また実際に資材等を手渡すことも在庫がなく入手できず、新規就農・経営継承時に発生する修繕費等、直ちに収益性向上に繋がらないものにも対応。

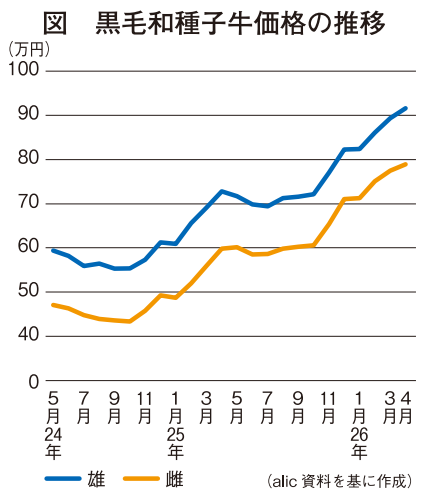
成果目標の設定と取り組みの例は次の通り。

☆取り組み: 国産粗飼料の単収向上のため、高品質な堆肥製造のための堆肥舎の改修。

☆成果目標: 国産粗飼料の生産量を5%増加。

☆取り組み: 飼料の5%以上の増、▼アニマルウェルフェア畜産物の販売量と販売単価の5%増、▼野生鳥獣による被害面積の5%低下、▼。

この持続性向上タイプは、農業構造転換集中対策期間の特例として、設定されている。



## 黒毛和種子牛の高値続く 9年振りに平均86万円超

(独)農畜産業振興機構 高、雌が78万9232円、雄が79万9232円。平均価格を地域別にみると、北海道でも86万円を超える市場が多くみられ、北海道全体では85万円台となった。熊本では89万9000円と、もう少しで90万円という状況となっている。

全国の上場頭数を見ると、3月で2万8383頭と、前年3月の3万2500頭より、1867頭減となっている。

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。

## 着実に復旧が進む「白米千枚田」



石川県輪島市の「白米千枚田」で5月9日から田植えが行われた。

一昨年元日の能登半島地震以降も、毎年行われており、1年目が120枚、2年目が240枚、今年が480枚と、年々水田の作付け枚数が増えており、水田の復旧は着実に進んでいる。

今年は、作業に参加できるオーナー制度が3年ぶりに再開され、全国から180名が参集した。他にもボランティアの人たちが多数参加した。

地元「白米千枚田愛研会」の白尾友一代表は、「少しずつでも復旧させて、何とかこの景色を守りたい」と決意を述べた。

(6%)減少している。さらに一昨年3月の3万2504頭と比べると、4121頭(13%)の減少となっている。

頭数減少の要因としては、24年頃まで子牛価格が安値で推移したことにより、繁殖農家が減少してきたことが挙げられる。また、買参人が移動距離を伸ばして競争が激しくなっている。

将来的には、子牛価格は下降傾向にあるが、頭数減はしばらく続き、相場は弱もちあいか。



表 2025年度用途別販売実績

用途	乳量(t)	前年比(%)
飲用牛乳等	2,868,695	98.5
脱脂粉乳・バター等	1,851,492	103.9
液状乳製品	1,283,304	99.6
チーズ	434,906	102.8
はっ酵乳等	414,471	98.4
合計	6,852,868	100.4

(中略の資料を基に作成)

### 飲用牛乳等向け5年連続減少 25年度用途別販売実績(中略)

中央酪農会議(中略)は4月15日、25年度の指定生乳生産者団体(指定団体)の用途別販売実績を公表した。

25年度累計の生乳総受託乳量(生産量)は、685万2868tで、前年より2万4532t(0.4%)増加した。地域別でみると、北海道が399万7840tで同4万1866t(1.0%)増で、都府県が285万5028tで同1万7333t(0.6%)減となった。

用途別販売実績(表)でみると、飲用牛乳等向けは286万8695tと、同4万3706t(1.5%)の減少となった。24年度の2.3%減よりは減少幅は抑えられたが、5年連続の減少となり、今後一層牛乳の消費拡大を図っていく必要がある。

### 観光農園 売上げ増加 農家レストラン 24年度6次産業化総合調査

農水省は3月31日、24年度6次産業化総合調査結果を公表した。この調査は、農業者等による農産物の生産関連事業(農産物直売所、農産加工、観光農園、農家民宿及び農家レストラン)による所得の増大をもたらす取り組みを総合的に調査するもので、生産関連事業を営む事業所を対象に、販売(売上)金額、従事者数等を調査している。

農水省は3月31日、24年度6次産業化総合調査結果を公表した。この調査は、農業者等による農産物の生産関連事業(農産物直売所、農産加工、観光農園、農家民宿及び農家レストラン)による所得の増大をもたらす取り組みを総合的に調査するもので、生産関連事業を営む事業所を対象に、販売(売上)金額、従事者数等を調査している。

これに対し、脱脂粉乳ではないが、増産が続けば、在庫削減が求められるため、今後も注視が必要。

チーズ向けは43万4906t(2.8%増)と、前年の減少から増加に転じた。

全国的に農業生産関連事業による年間総販売(売上)金額は2兆2244億円で、前年度に比べて0.7%増加した。

業態別にみると、農産物直売所は1兆1344億円で前年比0.7%の増加、農産加工も同0.6%の増加となった。

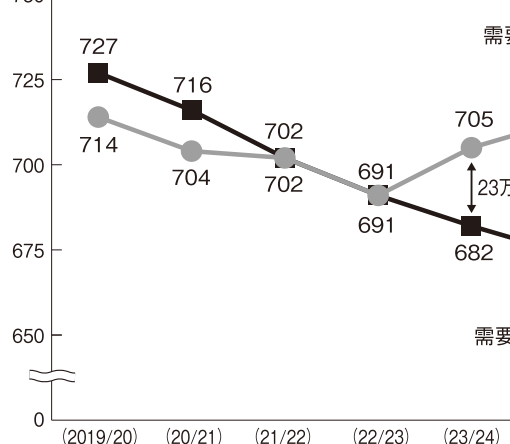
年間総販売(売上)金額に占める業態別の割合をみると、農産物直売所が最も高く全体の51%を占め、農産加工が約45%となっている。

しかし、全体から見れば少ない割合ではあるが、観光農園が391億円(前年比4.9%増)増、

新組合長に 江連克実氏  
那須帯根酪農協

那須帯根酪農協同組合は4月17日、第7回通常総会を開催し、役員改選を行った。総会後の理事会で、新代表理事組合長に江連克実氏を選任した。

図 需要実績と需要見通しの乖離



米の価格高騰の要因や対応の検証、②米の安定供給に向けた取組、③米の価格高騰の要因と対応の検証を踏まえた対応策と今後に向けて、の3項目からなっている。

①では、「令和の米騒動」と言われた、25年の米の価格高騰について、その要因を分析し、対応を検証している。

23/24、24/25年の実際の需要量は、精米歩留まりの悪化による玄米ベースでの必要量の増加に加え、インバウンド需要等により、需要の見通しと実績が乖離した(図)。

生産量が需要量に対して不足し、流通段階では集荷競争が発生し、比較的高い価格の米の調達が行われることとなり、米の価格が高騰。

しかし、同省では生産量が足りていると認識。このため、流通実態の把握に消極的で、また、政府備蓄米の放出時期が遅延したこと等により、更に米の価格が高騰した、としている。

②では、米の流通実態を詳細に把握するための調査を実施している。

③では、今後に向けて、26年産の生産量の見通しは、26/27年の需要見通しの上位値に合わせ、余裕をもつて設定する。水稲の収穫量に関する統計



「豊かなむらづくり」で天皇杯受賞  
岩手県金ヶ崎町・和光開拓

岩手県金ヶ崎町の和光開拓は、県の南西部に位置している。奥羽山系の山麓にあり、標高140mほどで、冬には積雪が1mを超える雪国だ。土壌は強酸性の火山灰で、作物の生育には向かず、畑を眺めては呆然と置かれる。奥羽山系の山麓にあり、標高140mほどで、冬には積雪が1mを超える雪国だ。土壌は強酸性の火山灰で、作物の生育には向かず、畑を眺めては呆然と置かれる。

### 特集に「米の安定供給に向けた対応」 25年度食料・農業・農村白書(案)

農水省は4月16日、食料・農業・農村政策審議会の企画部会を開き、25年度の食料・農業・農村白書(案)と、その内容は①米の価格高騰の要因や対応の検証、②米の安定供給に向けた取組、③米の価格高騰の要因と対応の検証を踏まえた対応策と今後に向けて、の3項目からなっている。

①では、「令和の米騒動」と言われた、25年の米の価格高騰について、その要因を分析し、対応を検証している。

23/24、24/25年の実際の需要量は、精米歩留まりの悪化による玄米ベースでの必要量の増加に加え、インバウンド需要等により、需要の見通しと実績が乖離した(図)。

48年、満蒙開拓少年義勇軍から帰国した人々を中心に、50戸ほどが入植した。

和光開拓の由来は、満蒙開拓時代の理想でもあった「天地相和して旭光を放つ」村づくりを通して、人相和して光輝く開拓地となるように、との思いが込められている。

ここは傾斜地が多く、田畑は限られており、全員酪農で生きていこうと決意し、53年に乳牛の1頭飼いかからスタートした。この年は冷害に見舞われたこともあり、酪農専門化へ拍車がかかった。

当初は酪農への知識が乏しく、事故も多かったが、北海道などの先進地から講師を呼ぶなど、あらゆる努力を払い、98年には飼養頭数が2000頭に迫るようになった。

また、日本一の開拓むらを目指す、93年度豊か

全国開拓振興協会 通常総会  
22日 ジャパンビーフarming協同総会(東京)

6月に予定されている開拓組織の主な行事は次のとおり。

6月  
2日 東北開拓組織連絡協議会通常総会  
4日 九州開拓連絡協議会通常総会  
8日 (株)全日本農協畜産公社定時総会(東京)  
9日 全日本開拓者連盟中央常任委員会  
10日 全日本開拓者連盟通常総会

26日 ゆうき青森農協通常総会  
24日 福岡県畜産事務所常総会  
25日 肥後開拓農協通常総会  
29日 静岡県開拓農協連通常総会  
開拓ながさき農協通常総会



討論会で知見を語る丸山さん  
写真提供：Jミルク

# 牛に愛を、従業員が主役に 丸山純さん(高士)が発表

Jミルクは3月2日、と題して発表を行った。東京都下で25年度「日本乳業の持続可能な酪農研究会」を開催した。この研究会で、富士開拓農協の組合員で朝霧メイプルファーム(有)代表取締役の丸山純さんが「良質な牛乳と高い生産力を生み出す酪農経営に向けて」と題して発表を行った。

丸山さんの発表内容を紹介します。●牛のために作らないルールは作らない。メイプルファームでは、「牛を愛すること」が二丁目一番地である。牛を走らせないといった具体的なルールに落とし込み、牛への愛を形にしている。このクレドの設定により、丸山さんは従業員が農場の「主役になった」という実感があると討論会で語った。

●データの蓄積とマニュアル化  
メイプルファームでは、このクレドの設定により、丸山さんは従業員が農場の「主役になった」という実感があると討論会で語った。また、荒野を切り拓いて朝霧高原の牧場を遺してくれた祖父の精神を受け継ぎ、チャレンジ精神は丸山さんも従業員も非常に旺盛だ。実験精神を大切にしており、Googleを送った。



生活クラブ生協のホームページから

# 「キタノチカラウシ」が新デビュー 北海道 ぶだんづかいの赤身牛肉

生活クラブ事業連合生活協同組合連合会は、提携する北海道チクレン農業協同組合連合会の組合員が生産する北海道産の赤身牛肉を、さらなる利用拡大と認知度の向上を図るため、この度「キタノチカラウシ」と新たに命名した。ロゴマーク(写真)には「ぶだんづかいの赤身牛肉」とキャッチフレーズが添えられている。北海道チクレンの指導の下、生産者が丁寧に育てた食のまなこを温めてごはんに乗せると牛丼になる。このほか、キタノチカラウシの普及と認知度向上の一貫として、レシピコンテスト「みんなのうちからチカラウシ」も開催する。テーマは「牛肉の普段使い」で、6月30日まで実施している。生活クラブのホームページから応募できる。キタノチカラウシの認知度向上を期待したい。

今回は、「石田さん」のホエーとスキムミルクを使ったお好み焼きを紹介する。今回使ったホエーは、前回紹介したチーズケーキを作る際に出たものを余さず調理に活用している。新生活が始まって少し時間が経ち疲れが出る頃なので、元気を付けるために、牛乳・乳製品を積極的に消費したい。☆ホエーとスキムミルクのお好み焼き 作り方

# 石田さんの おいしい! 畜産全開レシピ



ホエーとスキムミルクのお好み焼き 材料(2枚分)

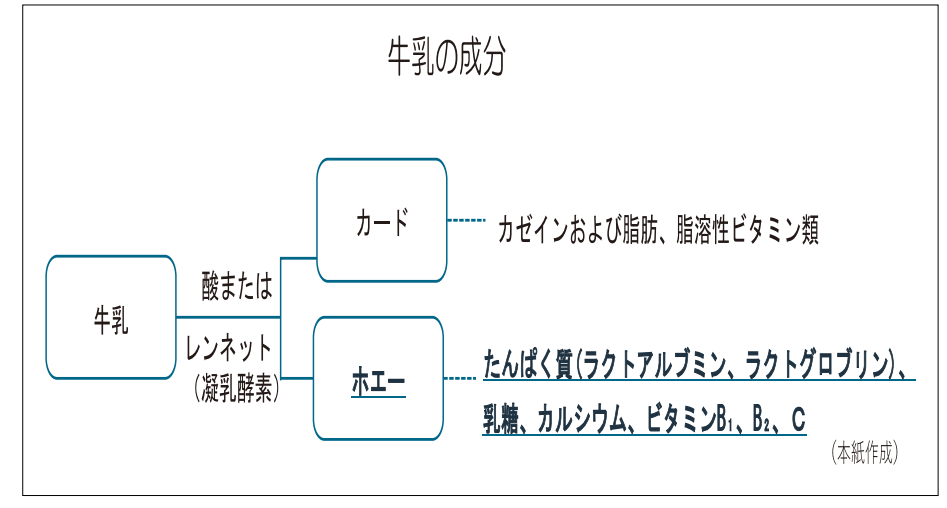
・ホエー	150ml (3/4カップ)
・スキムミルク	大さじ5
・お好み焼粉	100g (1カップ)
・キャベツ(粗みじん切り)	300g (6枚程度)
・お好み具	シーフードミックス、ネギ、ちくわ等
・卵	1個
・サラダ油	適量
・豚バラ肉(薄切り)	6枚

①ボウルにスキムミルクを入れ、ホエーを加えて溶かす  
②①にお好み焼粉を加えて混ぜ合わせる  
③キャベツ、お好みの具、卵を加えてさっくりと混ぜ合わせる  
④温めたフライパンにサラダ油をひき、生地を入れる。豚肉を生地の上に3枚乗せフタをしてきつね色になるまで焼く(弱火・中火)  
⑤裏返した面も④と同様に焼く



左の写真のザルで濾しているのが、先月号のチーズケーキを作る際に作ったチーズです。ボウルの中の黄色がかった液体が、今回調理に利用するホエーです!

牛乳は、乳酸菌などが加わって酸性になると、カゼイン(たんぱく質)などが凝固し、水分が分離されます(右図)。凝固したものをカード(凝乳)といいますが、残さず食べることで牛乳の栄養素を余すことなく摂ることができます! ヨーグルトを食べる時に、水分が出てきた経験





# 不屈の開拓魂で見事に復活 佐賀県唐津市・中山農場

佐賀県唐津市の切木第1開拓の中山農場は、中山工さん(72歳)と雪枝さん(68歳)の仲の良いご夫妻が経営する。同農場は、度重なる試練にも負けず、元気に養豚業を営んでいる。

切木第1開拓地は、標高200m、強酸性の土壌で極端な水不足地帯であった。気候は玄界灘から強風が吹き上げる風災地帯だ。

中山農場は、1世の勘治さんが1946年に27歳で入植。当初はサツマイモなどの畑作を行っていたが、次第に養蚕業へと移っていった。

64年に子豚を導入し、養豚・養蚕経営となっていく。

ところが、68年に豚熱(当時は豚コレラ)が発生し、中山さんら3戸が全頭殺処分となってしまった。しかし、本人たちのたゆまぬ努力と地域の支援により、同年に経営を再開することができ、肥育豚100頭規模を導入した。

2年後の70年に工さんが19歳で就農し、88年に母豚を導入しての一貫経営へと発展していった。翌89年には母豚規模50頭体制を確立し、養豚経営に専念するようになった。



それからは夫婦二人三脚で、紆余曲折がありながらも、研究と努力を重ねて養豚経営を発展させてきた。

しかし、不幸にも2023年に再び豚熱が発生し、母豚・肥育豚合わせて500頭が殺処分となってしまった。きめ細やかな衛生管理を徹底していただけに、二人の怒りと悲しみは計り知れないものがあった。

それでもご夫妻は前を向き、絶対に復活させるんだ、という強い熱意が周囲に伝わり、再開への道が拓けてきた。

養豚事業の再開に向け、今後の経営についての話し合いを行い、今までの一貫経営は体力的に困難なこともあり、肥育豚経営への変更となった。

佐賀県開拓畜産事協をはじめ、系統組織など多くの関係団体の支援もあ



上：豚舎に活気が戻り、充実した表情の中山夫妻  
左下：鉄壁な防疫態勢の農場 右下：子豚の写真も防疫に一役

り、25年1月子豚の定期導入を図り、同年4月から出荷が開始され、年間700頭の出荷体制が整った。

販売先は佐賀県内の業者で、県産の豚肉を求めていることから、佐賀県産開拓豚として、定時・定量・定質の豚肉を提供していく。

飼養衛生管理基準をこれまで以上に徹底し、イノシシの侵入を絶対に防ぐ

ための柵の強化を施している。衛生管理に関しては、換気には細心の注意を払い、消毒の噴霧装置も充実させ、子豚たちの健康で快適な環境作りを徹底している。

ご夫妻ともに実年齢より若く、「体力の続く限り、あまり欲張らずに長く続けていきたい」とこれからも長く続く未来を見据えていた。

## 新しい組織の仲間 Part2



赤川 知恵美  
開拓ながさき農協  
長崎県出身

初心を忘れず、日々感謝の気持ちを大切にしながら精一杯努力してまいります。



金子 朋夢  
開拓ながさき農協  
長崎県出身

一つ一つの業務を丁寧に覚え、生産者の皆様のお力になれるよう頑張ります！

## 口蹄疫や豚熱などの侵入に警戒 26年度家畜衛生主任者会議

農水省は4月17日、「26年度家畜衛生主任者会議」を開いた。冒頭、鈴木憲和農水大臣から、「訪日外国人客の増加もあり、アフリカ豚熱や口蹄疫などの侵入リスクがこれまで以上に高まっている」と注意を呼びかけた。

### ○鳥インフルエンザ○

昨年10月から、大規模家畜農場には分割管理の検討が義務化された。1月には、密集地域や過去に複数回発生があった全国44地域が「大臣指定地域」に登録された。該当地域の農場には、消毒薬の備蓄、塵埃対策、野鳥誘引防止対策などが義務付けられた。

### ○豚熱○

選択的殺処分でも、全頭殺処分と比べて豚熱まん延のリスクは変わらないという科学的評価を得た。選択的殺処分の仕組みを導入すべく、法律や防疫指針の改正に取り組んでいる。

### ○水際対策の強化○

韓国など近隣諸国でアフリカ豚熱や口蹄疫の発生が続いており、周辺国からの侵入リスクが高い状況だ。また、アフリカ南部でみられた「SAT1型口蹄疫」が中国にまで発生地域を拡大しており、こちらも侵入の警戒が必要な状態となっている。

## 人工授精はすべて前年より受胎率改善

### 23、24年次の延べ頭数受胎率

(一社)日本家畜人工授精師協会は、雌牛の全国規模の受胎率調査を実施し、24年次(速報値)と23年次(確定値)の受胎率データを3月末に公表した(表)。

受胎率の調査は23年度より調査が始

められた。各年次に実施された人工授精、受精卵移植の受胎率データを収集し取りまとめ、年度末に公表される。受胎率は、その年にすべての雌牛に授精、移植した延べ頭数による受胎頭数から算出している。

人工授精	雌の品種	精液の品種	24年次(速報値)		23年次(確定値)	
			延頭数	受胎率	延頭数	受胎率
乳用種	乳用種	乳用種(通常)	294,619	49.6%	344,756	45.9%
		乳用種(選別)	196,013	47.2%	191,281	46.7%
		肉用種	227,456	50.9%	262,724	49.5%
肉用種	肉用種	162,590	57.0%	332,145	53.0%	
卵移植	雌の品種	受精卵の品種	24年次(速報値)		23年次(確定値)	
			延頭数	受胎率	延頭数	受胎率
			乳用種	2,964	46.9%	3,514
肉用種	29,316	47.9%	43,744	48.9%		
肉用種	肉用種	12,654	47.6%	18,283	46.2%	
卵移植	雌の品種	受精卵の品種	24年次(速報値)		23年次(確定値)	
			延頭数	受胎率	延頭数	受胎率
			乳用種	4,248	38.3%	2,395
肉用種	17,167	44.8%	21,162	39.5%		
肉用種	肉用種	1,996	41.7%	2,420	39.6%	

(一社)日本家畜人工授精師協会の資料を基に作成

## 乳用種のみで発動 牛マルキン3月分

農畜産業振興機構は5月13日、肉用牛肥育経営安定交付金(牛マルキン)の交付金単価(26年3月分、確定値)を公表した。

乳用種で標準的販売価格が標準的生産費を下回ったため、交付が行われる。

交雑種および肉専用種は今月も発動がなかった。交雑種は、25年9月分の発動以降、半年間発動していない。

交付金単価(1頭当たり)は、乳用種が2万8743.3円(前月は3万357.9円、いずれも確定値)となっている。

前月分と比べ、乳用種は、畜産費や飼料費などが減少したため、交付金は減額となった。

超極早生飼料用  
トウモロコシ 「ハヤミノルド」

栽培体系次第で加温マルチなしでも

本紙815号で紹介した極早生品種トウモロコシ「ハヤミノルド」の、販売が始まった。日本の気候に合わせて研究・開発された品種で、今後普及が期待される。その特徴などを紹介する。

▽栽培体系次第で加温マルチ無しの栽培も可能

農研機構と北海道立総合研究機構が育成した。同品種は超極早生で、北海道の根釧・道北の気温が低い地域(栽培限界地域)でも加温マルチ無しの栽培が可能。また、北海道の温暖な地域では、秋小麦播種前の8月下旬から9月上旬に収穫できるため、さまざまな作付け体系に対応できる。

また、病害に強く、倒れにくいことから、道内のトウモロコシ作付け面積の増加、良質サイレージ原料の安定栽培や作業分散など、生産性向上への貢献が期待できる。

▽「雨の国：日本、の課題克服へ

国内で普及している飼料用トウモロコシの大部分を占める外国産品種は、良好な環境では高収量を期待できるが、低温、寡日照、長雨など日本特有の環境下では収量が不安定になりがちだ。加えて、北海道では登熟のために加温マルチが必要な地域もある。加温マルチは、昨今の中東情勢でより顕著に資材費や燃料代がかかるほか、作業が増える等のデメリットがある。そのなかで、同品種はこのような気温が低い地域でも栽培できる。

同品種の特徴は以下のとおり。

①超極早生：標準品種と比べて絹糸(トウモロコシの実のヒゲ)の抽出期は10日ほど早く、概ね発芽から実ができるまでの日数を表すRMO〇日の〇〇日も、標準品種よりも10日ほど短い60日で、現在流通している品種の中で最も早くなっている。乾物収量・TDN収量は従来品種の86%だが、その分早く刈ることができるため、同じ期間植えていれば同等の栄養価が期待できる。

②病害に強い：病害抵抗性については、すす紋病抵抗性は「かなり強」、ごま葉枯病抵抗性も標準品種と同程度に強い。また、赤かび病接種検定でも、発病面積率が低かった。

③倒伏性状が強い：近年北海道でも増加傾向にある台風や強風による倒伏被害に対して、強い耐性を発揮している。



ハヤミノルドの草勢

乳脂率4.042%に微増  
25年 集乳路線別調査

(公財)日本乳業技術協会は3月27日、25年(1~12月)の全国集乳路線別生乳成分調査の結果を公表した。8つの協力先から回答を得た。

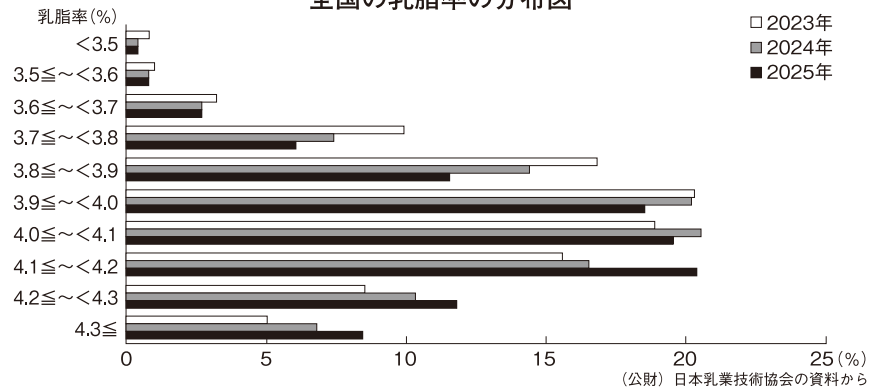
工場に搬入された生乳を、ローリー単位で調査路線数とした。7683路線(前年調査比58路線増)が対象となっている。1日当たり全生乳生産に対する調査対象乳量の割合は41.7%(0.2%増)であった。

全国の乳脂率の平均は、4.042%(0.023%増)で、全国通年の平均を上回ったのは北海道(4.064%)のみだった。

乳脂率は4.1%以上4.2%未満が最も多く、20.4%(3.9%増)となった。次いで4.0%以上4.1%未満が19.5%(1.0%増)、3.9%以上4.0%未満が18.5%(1.7%増)となっている。北陸で、3.5%未満の割合が1.7%と全国平均よりも高かった。

無脂乳固形分の全国通年平均は、8.886%(前年比0.030%増)となっている。

全国の乳脂率の分布図



ハヤミノルドの栽培暦

作型	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
栽培限界地域 (道北、根釧)	播種		マルチ不要			WCS収穫			
道内の良い地域 (標準播種)	播種		WCS収穫			子実収穫			
	播種		WCS収穫			後作 (秋小麦、牧草など)			
(上川) (網走) (十勝) (道央) (道南) (参考) 通常品種 標準播種	播種		WCS収穫			子実収穫			

WCS：青刈りサイレージ、子実：子実トウモロコシ  
写真・図ともに農研機構の資料から

平均離乳頭数10.7頭に増加

25年 養豚農業実態調査

(一社)日本養豚協会は3月31日、25年度(8月1日現在)の養豚農業実態調査の結果を公表した。489件の養豚生産者から回答を得た。

◎繁殖成績

1腹当たり平均哺乳開始頭数は11.9頭(0.1頭増)、平均離乳頭数は10.7頭となっている。また、平均育成率は89.9%で、繁殖成績は全体的に上昇傾向にある。1腹当たり平均分娩率は

85.9%となっており、母豚回転数は2.3回となっている。また、年間離乳後事故率は7.5%となっている。

◎肉豚の出荷状況と肥育成績

平均出荷日齢は182.4日(前年度比0.4日減)となっている。肉豚出荷体重は113.3kgと対前年度比1.4kg減、平均枝肉重量は76.1kg(1.7kg増)、1日平均増体量(D.G.)は621.2g(6.3g減)となった。平均出荷生体重と1日平均

表1 繁殖成績

	分娩率 (%)	産子数	哺乳開始頭数	離乳頭数	育成率 (%)	母豚回転数
25年	85.9	13.3	11.9	10.7	89.9	2.3
24年	86.3	13.2	11.8	10.6	90.2	2.3
23年	86.2	12.7	11.5	10.4	90.3	2.2
22年	85.5	12.8	11.5	10.3	90.2	2.3
21年	86.3	12.7	11.5	10.3	90.2	2.3

表2 肥育成績

	出荷日齢	出荷体重	D.G. (%)	枝肉重量	枝肉歩留 (%)	上物率 (%)
25年	182.4	113.3	0.621	76.1	65.6	58.8
24年	182.8	114.7	0.628	74.4	65.6	58.4
23年	182.2	113.8	0.625	75.0	65.5	55.4
22年	182.6	113.4	0.621	74.7	66.1	56.4
21年	182.8	113.2	0.619	75.7	64.5	55.8

(一社)日本養豚協会の資料から作成

増体量が増加傾向にある。

出荷日齢などに大きな変化がない中、平均枝肉重量が1.7kg増加したが、これは23年1月より26年ぶりに改正された豚枝肉取引規格が適用され、重量帯の上限と下限が3kgずつ引き上げられたことが要因として挙げられる。

◎上物率・歩留まり

全国の格付けしている豚のうち上物率は平均して58.8%で、前年から0.4%増加した。また、平均歩留まり率は65.6%で、前年と同率となった。上物率は上昇傾向にある。

◎経営

一貫経営が84.7%(405経営体)と最も多く、次いで肥育経営体が12.6%(60経営体)、繁殖経営体が2.7%(13経営体)と続く。経営タイプ別では、肉豚経営・繁殖経営の両方(一貫経営)が83.5%(409経営体)と最も多い。

◎環境対策と非常時対策

汚水浄化施設を保有する経営体が80.9%と8割を超えている。排水処理方式は「連続式活性汚泥法」が約7割で最も多く、次いで「回分式活性汚泥法」が約3割となっている。災害等の非常時の対策として「非常用発電機」を確保している農場は57.7%だった。

# 使用前、周囲よく見てラベル見て 26年度農薬危害防止運動

農水省は4月28日、「26年度農薬危害防止運動」の実施を発表した。実施期間は6月1日～8月31日までの3ヵ月間。農薬を使用する機会が増えるこの時期に、農薬による事故・被害を防止するため、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理、環境への影響に配慮した農薬の使用等を推進する。

同省が1月に公表した「24年度農薬の使用に伴う事故及び被害の発生状況について」によると、24年度の農薬の使用に伴う人に対する事故は17件、農作物や魚類に対しては11件発生した。いずれも前年より発生件数が減少した。

26年度の運動テーマは「使用前、周囲よく見てラベル見て」とした。農薬ラベルの表示事項の遵守と周辺環境への農薬の飛散防止を徹底することなどを呼び掛けていく。

取り組み事項は、農薬とその取り扱いの正しい知識の普及啓発、農薬によ



る事故防止のための指導、適正使用等の指導など5項目。重点指導事項は、①ラベルによる使用方法の確認、②土壌くん蒸剤使用時の適切な取り扱い、③住宅地等で農薬を使用する際の周辺への配慮及び飛散防止対策、④誤飲・誤食、盗難等防止に向けた適切な保管・管理の4項目となっている。

## 多収で高温・病害に強い水稻新品種 みなもさやか育成 農研機構

西日本では、温暖化による登熟期の高温により、主力品種「ヒノヒカリ」の玄米品質の低下が問題となっており、新品種の開発が求められている。

そこで農研機構は、登熟期間中に高温に遭遇しても玄米品質が低下しにくい水稻新品種「みなもさやか」を育成した。品種名の由来は、清流の水面(みなも)のような透明感のある良質な米が生産されることを願って命名された。

「ヒノヒカリ」に対し、玄米の外観品質は良好で、育成地(福岡県筑後市)における標肥栽培で2割程度多収、炊飯米の食味も同等だった。いもち病に強く、縮葉枯病抵抗性を持ち、「ヒノヒカリ」の栽培が可能な関東以西の平坦地で栽培が可能だ。

農研機構は、「ヒノヒカリ」に代わる品種として普及を目指し、種子については28年の作付け用から生産者への供給が始まる見込みとしている。

## 天候不順でタマネギ収穫量大幅減 25年産指定野菜(春、夏秋)収穫量

4月28日に農水省が公表した「25年産指定野菜(春野菜、夏秋野菜等)の作付面積、収穫量及び出荷量」によると、全国の収穫量は前年産に比べ、春野菜は1%、夏秋野菜は2%、タマネギは18%、いずれも減少した。

### 【春野菜】

作付面積は3万1900haで、前年産より1000ha(3%)減少した。収穫量は1万7000t(1%)減の175万6000t、出荷量は2万6000t(2%)減の162万6000tだった。

10品目の収穫量をみると、冬春ピーマンや春夏ニンジンなど6品目が減少

している。減少率が最も大きかったのは冬春ピーマンで、10月と12月から2月にかけての低温や日照不足により、花落ちや実の肥大の抑制がみられたことなどから、8%減少した。

### 【夏秋野菜】

作付面積は5万5500haで、前年産より1900ha(3%)減少した。収穫量は3万2000t(2%)減の209万5000t、出荷量は3万8000t(2%)減の184万3000tとなった。

10品目の収穫量をみると、夏ハクサイ、夏秋キャベツ、夏秋キュウリ以外の7品目が減少している。夏ハクサイ

# 野菜卸売数量2%減、果実は前年並み 青果物卸売市場調査結果(25年)

農水省は4月21日、「青果物卸売市場調査結果(25年年間計及び月別)」を公表した。

25年の青果物卸売市場における野菜の卸売数量は802万tで、前年より2%減少した。これは、ダイコン、レタスなどの卸売数量は増加したが、バレイショ、タマネギなどの卸売数量が減少したことによる。卸売価格は2兆1710億円で、前年並みだった(図1)。

キャベツやレタス、キュウリなどの卸売価格は減少したが、バレイショ、

タマネギなどの卸売価格が上昇したため、前年並みとなった。卸売価格は271円/kgで、2%の上昇となった。

果実の卸売数量は235万tで、リンゴやモモなどの卸売数量は減少したが、ミカン、カキなどの卸売数量が増加したため前年並みとなった(図2)。卸売価格は1兆1299億円で、リンゴやブドウなどの卸売価格は減少したが、ミカン、イチゴなどが増加したため1%増加した。卸売価格は481円/kgで前年並みだった。

図1 野菜の卸売数量及び卸売価格の推移(全国)

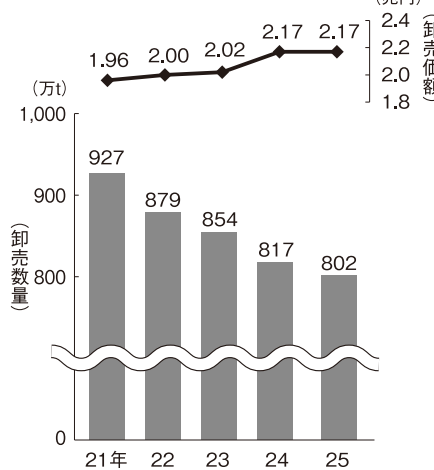
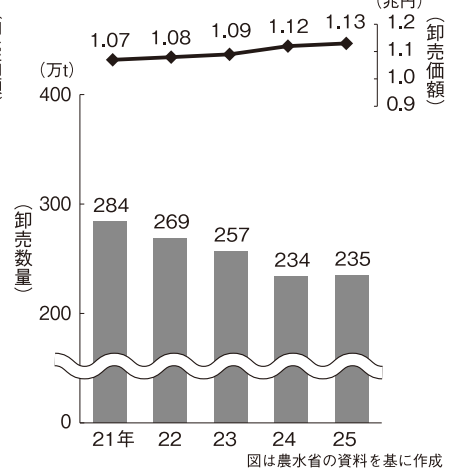


図2 果実の卸売数量及び卸売価格の推移(全国)



図は農水省の資料を基に作成

## 汚泥肥料の肥効見える化アプリ WEBアプリでだれでも利用可能

近年、下水等を浄化する際に生じる「汚泥」の肥料利用が注目されている。これら有機性の資源は、堆肥化や加熱乾燥等により、衛生面や農地への散布のしやすさを改善し、土づくり資材や肥料として利用されている。しかし、化学肥料と比べ、作物への肥効の見積もりが難しい現状にある。

そこで、農研機構などの研究グループは、畑地に施用した汚泥肥料等からの養分供給量を試算(見える化)するWEBアプリを作成し、公開した。全国から汚泥を原料とする肥料等を収集し、その養分含量(窒素、リン酸、カリウム)を解析し、アプリを作成した。

### アプリ



[https://soil-inventory.rad.naro.go.jp/main/menu/sludge\\_info/](https://soil-inventory.rad.naro.go.jp/main/menu/sludge_info/)

アプリでは、畑の位置、汚泥肥料の種類(コンポスト、乾燥汚泥など)、施用量や施用時期を選択するだけで、施用した汚泥肥料等からの平均的な養分供給量が表示されるため、どれだけ化学肥料を減らすことができるか、検討しやすくなる。

また、平均的な汚泥肥料の養分含量に基づく試算ではなく、個別の汚泥肥料の養分含量をアプリに入力することで、精密に肥効を試算することも可能としている。

アプリは、農研機構「日本土壌インベントリー」の「土壌管理アプリ集」から無料で利用できる(図)。

### マニュアル



[https://www.naro.go.jp/publicity\\_report/publication/laboratory/ni\\_aes/manual/174701.html](https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/laboratory/ni_aes/manual/174701.html)

図 アプリおよび関連資料の公開URL等

は、主産地である長野県で天候が良かったことや作付面積が増加したことなどから、収穫量は6700t(5%)増加した。

### 【タマネギ】

作付面積は2万4300haで、700ha(3%)減少した。収穫量は20万4000

t(18%)減の92万2000t、出荷量は19万7300t(19%)減の82万6700tとなった。

北海道で6月中旬からの高温や、6月下旬からの少雨により生育が停滞し、肥大の抑制がみられたことなどが影響したため、大幅な減少となった。

# 食料品の消費者物価指数上昇 牛肉の上昇率がわずかに加速

総務省は4月24日、20年を基準(100)とした消費者物価指数を公表した。今回は毎年3月のデータで比べてみた。

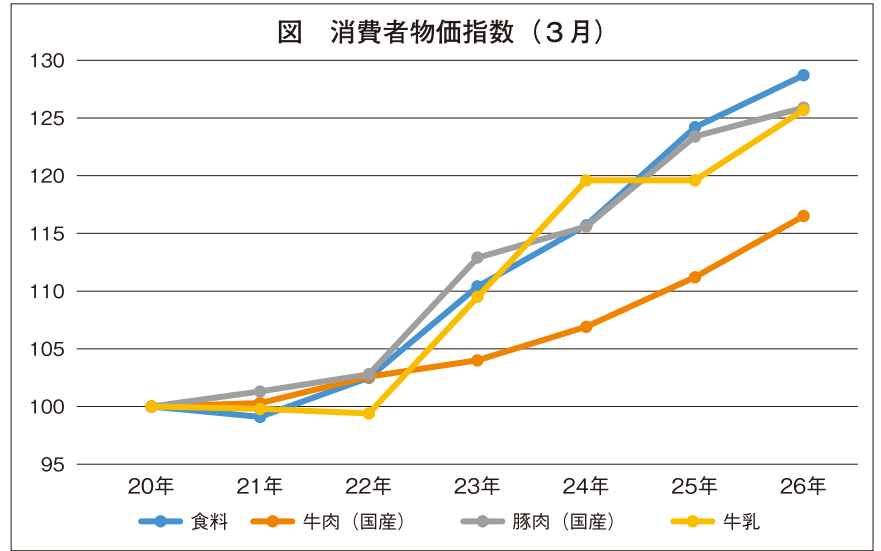
食料品全般では、26年3月で20年より28.7%上昇した。前年よりも4.5%上昇しており、5年連続の上昇となった(図参照)。

国産牛肉は、20年より16.5%上昇し、6年連続で上昇しているが、食料品全般と比べると伸び率が鈍い。食料品全般で物価が上昇している中で、やはり単価が高い牛肉は伸びが鈍くなっている。しかし、前年から見ると5.3%上昇しており、食料品全般より高い伸び率

となっている。インバウンド需要の影響もあり、食料品全般に少し近づいてきたか。価格が上がれば、消費者の購買意欲は下がってくるが、肉牛経営の安定のためには、物価指数全体の上昇に遅れるわけにはいかない。

国産豚肉は、20年より25.9%上昇したが、前年よりは2.5%の上昇に留まっている。前年までは食料品全般と似たような伸びとなっていたが、26年はやや伸びが鈍くなってきたようだ。今年も枝肉相場が好調なことから、指数も上昇する可能性がある。

牛乳は、20年より25.7%上昇してお



(alic 資料を基に作成)

り、前年より6.1%の上昇となった。24年は値上げは無かったが、25年は乳価交渉で値上げとなり、物価指数も上昇することとなった。

また、米については、24年まではほぼ横ばいの1.7%の上昇に留まっていたが、令和の米騒動があり、26年には108.5%と、驚異の上昇となった。

## 牛枝肉 夏までの不需要期も、弱もちあいで乗り切るか

連休明けとなっても、相場は例年より高値を維持している。夏までは不需要期となるが、頭数減もあり、弱もちあいに留まるか。

【乳去勢】4月の東京食肉市場の乳牛去勢B2の税込み枝肉平均単価(速報値)は、1347円(前年同月比114%)となり、前月より34円上がった。

5月に入っても、B2で1300円台の動きとなっている。出荷頭数は前年並みの予測なので、弱もちあいで推移となりそう。

【F1去勢】4月の東京食肉市場の交雑種去勢の税込み枝肉平均単価は、B4が1857円(同106%)、B3が1794円(同111%)、B2が1714円(同115%)だった。前月に比べ、B4が138円、B

3が128円、それぞれ続伸した。

5月に入ると、B3で1800円台と、強含みの推移となっている。

【和去勢】4月の東京食肉市場の和牛去勢の税込み枝肉平均単価はA5が2720円(同108%)、A4が2539円(同112%)、A3が2431円(同114%)だった。前月に比べ、A5が85円、A4が90円、A3も110円、それぞれ前月に続き強含みとなった。

5月になると、A4で2500円台を維持しているが、頭数は減少傾向にあり、強もちあいの推移か。

【出荷頭数】5月の出荷頭数は、和牛3万8200頭(同89%)、交雑種1万8900頭(同94%)、乳用種2万1200頭(同99%)と、乳用種以外は減少傾向となっている。

【輸入量】農畜産業振興機構は5月の冷蔵・冷凍品の輸入量を総量で4万

1200t(同85%)と予測。内訳は、冷蔵品1万2300t(同76%)、冷凍品が2万8900t(同90%)。

向こう1ヵ月の東京食肉市場の税込み枝肉平均単価は、乳去勢B2が1200~1300円、F1去勢B4が1800~1900円、同B3は1750~1850円、同B2が1650~1750円、和牛去勢A5が2650~2750円、A4が2500~2600円、同A3が2350~2450円での推移か。

## 豚枝肉 出荷頭数減で、相場は強もちあいの推移か

4月の東京食肉市場の豚枝肉税込み平均単価は、上物769円(前年同月比128%)、中物は741円(同129%)となった。前月に比べ上物が92円、中物は88円ともに上がった。

連休前は800円台の動きとなったが、連休明けになると700円台での推移となっている。

荷動きは目立った動きは見られないが、出荷頭数がかなり減少する見込み

## 畜産物需給見通し

で、時期的にも相場が活発になる季節となるので、今後の動きが注目される。

農水省の肉豚生産出荷予測によると、5月は117万頭(前年同月比90%)と、かなり減少する予測となっている。

農畜産業振興機構の需給予測によると、5月の冷蔵・冷凍品の輸入量は総量

で8万8100t(同97%)と、やや減少する見込み。内訳は、冷蔵品3万8100t(同110%)、冷凍品5万t(同89%)。冷蔵品は、牛肉等の相場上昇からのシフトで上昇が見込まれる。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、出荷頭数の減少と、需要期が続くことから、相場は強もちあが見込まれる。上物が750~850円、中物も700~800円での推移か。

### 4月の子牛取引状況

(単位:頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	460	488	301	295	239,327	230,110	795	780
	F1去	2,150	1,687	347	336	473,471	485,105	1,364	1,444
	和去	2,527	2,249	348	340	907,783	872,355	2,609	2,566
東北	乳去	6	-	223	-	157,483	-	705	-
	F1去	1	6	267	298	325,600	379,683	1,219	1,274
	和去	2,240	2,265	329	325	908,796	878,517	2,763	2,702
関東	乳去	42	-	285	-	275,681	-	968	-
	F1去	106	108	356	345	482,734	485,456	1,357	1,406
	和去	893	645	326	335	904,253	892,373	2,772	2,660
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	161	71	294	326	831,272	853,770	2,827	2,619
東海	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	69	51	331	323	496,961	485,941	1,501	1,504
	和去	243	415	279	289	911,407	901,502	3,262	3,119
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	302	342	263	264	1,165,308	1,149,886	4,426	4,362
中四国	乳去	58	45	303	325	214,102	221,980	706	684
	F1去	248	220	327	320	504,346	498,945	1,544	1,557
	和去	950	766	316	317	905,834	879,151	2,866	2,772
九州・沖縄	乳去	-	4	-	310	-	146,575	-	473
	F1去	218	275	330	324	554,254	548,464	1,680	1,691
	和去	5,912	9,206	309	625	915,470	894,965	2,963	1,432
全国	乳去	566	537	299	298	238,572	228,806	798	768
	F1去	2,792	2,347	343	333	483,400	493,591	1,409	1,482
	和去	13,228	15,959	320	314	916,026	894,030	2,863	2,847

注(独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

## 素牛 スモール 乳雄・F1スモールは、頭数減が続くか

【スモール】4月の全国24市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産業振興機構調べ、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳雄が13万5603円(前年同月比156%)、F1(雄雌含む)は26万3767円(同121%)で、前月に比べ、乳雄は2万3360円、F1も3万7568円共に続騰した。

乳雄は、頭数増加は見込めず、今後も強もちあいか。5月に入りF1で30万円を超える市場も出てきた。しばらくは受胎率が悪かった時期の子牛なので、頭数は少ないと予想される。枝肉相場が活発になっており、スモール価格も下がりづらい状況となっている。

【乳素牛】4月の乳素牛の全国1頭当たり税込み平均価格(左表、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳去勢が23万8572円(同116%)、F1去勢は48万3400円(同118%)だった。前月に比べ乳去勢は9766円上がり、F1去勢は1万191円下がった。

F1去勢は、相場が上昇してきているので子牛の引き合いは強く、頭数の増加は見込めないで、今後も強もちあいが予想される。

【和子牛】4月の和子牛去勢の全国1頭当たり税込み平均価格(同)は、91万6026円(同126%)で、前月より2万1996円上昇し、3ヵ月連続の急騰となった(1面参照)。

※なお、今回の子牛取引状況は、宮崎県のデータは未記入となっている。